

活動状況報告（1月）

学生留学コース 5期生 酒井 友希

1月はポーランドの旅が終わりロヴァニエミでまた授業が始まり普通の生活が始まりました。今回の報告書では旅と私が半年間フィンランドにいたことにより感じた自身の「環境に配慮した観光」というテーマについてどう考え方が変わり始めているのか記します。

クリスマスに友人の家族と過ごした後、正月は一人でポーランドの南の旧市街があるクラクフで過ごしていました。ウクライナの方にスープを届けるボランティアもやりつつ、年明けすぐの1月3日はアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所へ足を運びました。今回の訪問はあいにくガイドツアーに参加ができなかったので一人で見学をしました。教科書やドキュメンタリーでナチスやホロコーストについて知っていましたが、実際にそこへ行くと非常に悲しい気持ちになりました。

何万人の命を奪ったガス室はその場所が悲しく早歩きで過ぎ去りました。その場所が呪われている、怨念がある。なんてそんな気持ちにすらなりません。きっと辛かったとだろうと思うと、安らかに眠ってほしい思いでいっぱいになりました。そして、気持ちが悪いほど、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所は広く、ここまで広い地でジェノサイドが起きていたことが信じ難い気持ちになりました。

ロヴァニエミに帰ってきた後はアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所で多くの罪なき人々が痛ましい形で亡くなっている過去があるのに対し、なぜ今もウクライナから始まる戦争で罪のない人が亡くなっているのか混乱していました。また、ウクライナのボランティアの現場から離れて自分には何ができるのか、あまり答えが出ず、落ち込んでいるのが1週間くらいありました。

そんな状況でしたが、新しく授業が始まると段々とまた元の生活に戻って行きました。今学期は改めてフィンランドについて深く知りたいと思い、Understanding Finland という授業を履修しました。その他にCivic Education, Good Governance & Active Citizenshipの授業も取っており、政治についてと積極的に地域社会に関わる市民になるため等について学んでいます。

Understanding Finlandではフィンランドを知るための主要なこと、歴史・国の結束力・信用・平等・自立心・振るまいを中心に学び最後は日本と比較をするエッセイを書きました。この授業では半年間フィンランドにいて感覚として感じていたことを歴史やフィンランド人の行動の背景を理解することで新しい発見がありました。まず、フィンランドの社会では「信用」がとても大事です。脱税をすることは、非常に大きい罪とされます。このことを知ったあとにピュハスキーリゾートのウェブサイトのresponsibility programをみると”A FAMILY BUSINESS THAT PAYS TAXES TO FINLAND”と書かれている部分の背景が少し理解できました。

(<https://www.pyha.fi/en/skiresort/responsibility>) 以前であればなぜそこまで納税に重きを置いているのかについて、気づいていませんでした。しかし、フィンランドでビジネスをする上で正当に納税をすることが会社の透明性と信用を上げることに直結しているのと高福祉国家であるからこそ脱税はもはやタブーのようなものに見られていることに気づきました。

また、ピュハスキーリゾートがスキー場の近くで実施されている採掘プロジェクトに反対を、採掘作業の中止を求める請願書に署名をしていることをフィンランド人の友達に教えても

りました。

(<https://www.pyha.fi/fi/hihtokeskus/uutiset/pyhatunturi-oy-vastustaa-kaivosankkeita>)

先日、ピュハスキーリゾートへ滑りに行った際に印象的だったのが、リフトの広告が OATLY だったことです。OATLY は植物性由来のオーツミルクの会社で環境負荷を最小限にするために廃棄物再利用のプラスチックをキャップに、紙ストローを採用しています。ここまでサステイナブルな企業が大胆にスキー場の広告を占めていると、フィンランドやヨーロッパ圏の環境に配慮した商品への親しみの違いを改め感じました。その他にスキー場の看板にカーボンフリーであることが書かれていました。

フィンランドへ来る前はビジネス的観点から環境に配慮したやり方だとお客さまが増えることや環境先進国のフィンランドの事例をロールモデルにして学ぼうとしてきました。ただ、この半年間を経て、「環境に配慮した観光」の実現は一個人とそれぞれの機関もしくは企業がどこまで社会の問題の影響を自分ごととして捉え、責任を感じてアクションを取ることが大きく左右することを感じました。フィンランドへ来てから沢山の人がセカンドハンドの衣類を買っています。大学の友達で森林伐採を止めるために森でメンバーたちと寝泊まりをして活動していると聞きました。日本からの目線だと「素晴らしい」と思うかもしれませんが、彼女、彼らからすると「正しい」と思うことをしているだけのように感じてきました。

個人が真摯に未来に向き合い現状を判断する能力をつかないと、どれほど環境に配慮した新しいモデルやファクトを知っていても日本に住んでいる我々がそれを積極的に求めないと現状を変えるのはとても長い道のりのように感じます。ピュハスキーリゾートはリフトはグリーンエネルギーで動かされています。ですが、インフラで大きな役割を持っているエネルギーをグリーンエネルギーに変えるのは、市民の価値観との共感がないと非常に難しいと思いました。

Civic Education, Good Governance & Active Citizenship の授業では積極的に社会に参加をする市民について学んでいます。その中で私たちが一つの国に属しているのではなく世界（地球）全体のグローバル市民の意識を持たなければ世界全体の問題を解決するのは難しく、各国が団結して物事を考えづらいと思います。今回の報告書は少し厳しいことを書きましたが、モデルをコピーペーストできないと考えていた根本的な理由に少しずつ気がついてきて私としては大きな進歩だと感じています！現場での事例を大事にしつつ、一人の市民として環境に配慮したものを実現するためにはどのような行動を取るべきかアンテナを張って生活をし残りの留学生活も有意義なものにしたいと思います。



“To the memory
Of the men, women, and children who
fell victim to the Nazi genocide. Here lie
their ashes.
May their souls rests in peace.”

“ナチスの大量虐殺の犠牲になった
男性、女性、そして子供たち。ここに
彼らの遺灰を眠らせます

彼らの魂が安らかに眠れるように“

気持ちが悪いほど非常に広い、強制収容所



